Chapter 3 : またガチャが全てをぶち壊す・前編

クライマックスの戦いから三日後、ようやく平穏が訪れようとしていた。

ブラッキーとエーフィは、復元された神殿のすぐ外、満開の桜の下で並んで座っていた。ベリーを分け合いながら、半ば照れたように微笑みを交わしている。

近くにはホウオウとアブソルが見張りのように立っていたが、その姿はどちらかといえば気まずい叔父たちに見えた。

アブソルは空を見上げ続けていた。「何か、おかしい。」

ホウオウは神々しい茶をすする。「被害妄想じゃな。」

その瞬間――空が裂けた。

歪んだ光と偽のきらめきを放ちながら、機械が降下してくる。

巨大で輝くレックウザが、カプセル式ガチャマシンと融合した姿で地上に降り立った。

「伝説級戦利品と怪しげなスキンが当たるぞォォォ！！回せェェェェ！！」

声は広告のようにバグり、ノイズ混じりに響き渡った。

アブソルの体が硬直した。瞳孔が開く。「……いや、やめろ。もう……もう嫌だ……」

※フラッシュバック：ガチャバナー。ゼロ回。0.5%の闇。出なかったミミロップスキン。

「ギャアアアアアアアアッ！！」叫びながら突進。

レックウザが瞬きをした。「えっ？」

突風のような一撃でアブソルが吹き飛ばされ、鉄柱に叩きつけられた。ゴンッ。まるで気絶したコラッタのように落下。

「アブソルッ！！」エーフィの悲鳴が響く。

ホウオウはすぐさま舞い上がり、不死鳥の魔力で彼を癒した。「そなたは、ほんにこれをやめるべきじゃ……」

ーー

誰も立ち直る暇もないまま、

バンギラスが地中から現れた。「俺はァ！復讐を！果たすんだよォォォ！！」

ドゴォォン！！

吠えながら飛び出したが、勢い余ってレックウザのカプセル脚に体当たり。レックウザがたたんでいた脚をちょうど戻していたその瞬間だった。

血。コイン。四肢。伝説のウロコ。

全員が固まった。

「……なんだこれ……」バンギラスは、テクノブラッドまみれになり、ポケコインの山に囲まれながらつぶやいた。

ブラッキーとエーフィは同時にまばたいた。「あれって……わざと？」

ホウオウは現場を見下ろし、混乱しきった様子で少し沈黙した後、金貨の詰まった袋をバンギラスに手渡した。「ご苦労だった。真の邪悪は倒された。」

「……俺が……英雄……？」バンギラスは固まったまま呟く。

回復したアブソルがフラつきながら近づいてきた。「もうエーフィにこだわらなくていいんじゃねぇの。他にも女の子いっぱいいるしよ。」

羽の指を一本ずつ立てながらリストアップする。

「アマージョ、ドレディア、フェローチェ、エンニュート、ミミロップ……ルカリオがまたやらかしたら、もしかしてサーナイトもいけるかもな。」

「……ま、始まりとしては悪くねぇな……」バンギラスは瞬きしながら答えた。

そしてカメラは、血とコインと花びらと神々しい混乱に包まれた四匹を、静かに引いていった。